

発掘された会下山遺跡

会下山遺跡からの眺望

会下山は六甲山から南へのびる尾根で、山頂の標高は201.2 mです。東側の山裾には、芦屋川の支流である高座川が流れています。西側の山裾には「しのき谷」と呼ばれる谷があって、神戸市との市境となっています。

山裾までは開発が進み市街地が迫っていますが、南側の山裾にある会下山遺跡の入り口から山に入ると、緑豊かな自然が広がっています。遺跡には、入り口から登山道を8分ほど歩くと到着します（裏表紙を参照）。

高地性集落の特徴のひとつは、見晴らしが良いことです。会下山遺跡の山頂にあるS地区祭場跡からの眺めは、大変すばらしいものです。その景色は、南に大阪湾が見え、東の大阪平野には市街地が広がり、その奥に横たわる生駒山地、二上山、葛城・金剛山地を見わたすことができる大パノラマです。さらに、天候に恵まれた日には、遠くの和泉地域や紀伊山地まで見ることができます。また、南西の方角には、神戸市域の住吉川付近や六甲アイランド付近まで見ることができます。



会下山遺跡の最高点（S地区）からの眺め（南東方向を望む）

発掘された集落跡

会下山遺跡では、^{たてあな}竪穴住居跡や祭場跡、^{あつ}火たき場跡、^{ほり}堀跡、^{はか}墓跡などが発掘されています。

これらの中で、竪穴住居跡5棟は、埋め戻さずに、芝を貼って、現地で見学できるようになっています。

会下山遺跡の住居

会下山遺跡では、竪穴住居跡が9棟見つかっています。これらの竪穴住居跡は、平面が円形や楕円形で、大きさは直径が5 mほどのものから9 m前後のものまであります。竪穴住居1棟には、5人前後が住んでいたと考えられます。

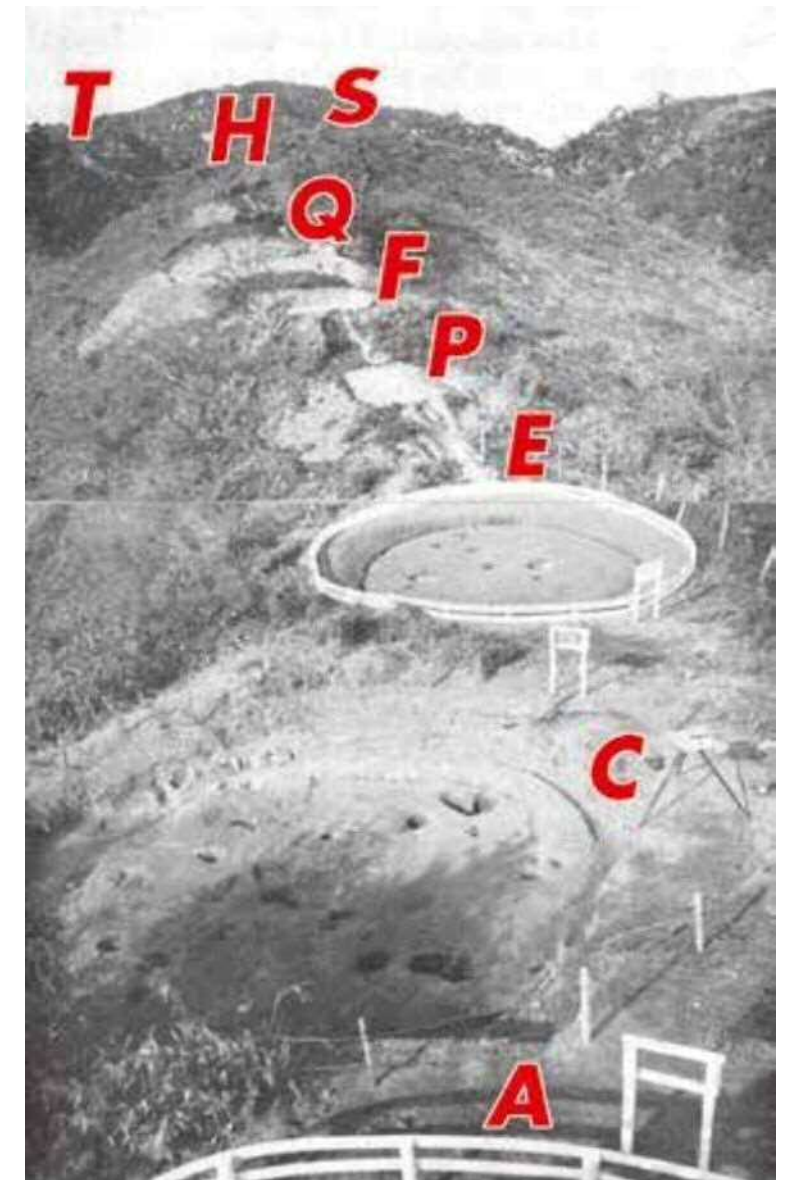
竪穴住居は、地面を数十cm掘り下げて、平らな床面をつくり、その上に茅葺きの屋根を伏せたような構造となっています（15 ページ「復元竪穴住居」参照）。

発掘された竪穴住居跡には、柱穴や、調理や照明、暖房のために火を用いた炉の跡などが見つかっています。

興味深いものに、他の竪穴住居跡より高い場所で見つかったF地区住居跡があります。直径が8.2～9.8 m、面積が約60㎡もあり、遺跡内で最大の竪穴住居跡です。そして、当時、大変貴重であった鉄器や、ガラス小玉などが集中して出土しました。



発掘されたC地区竪穴住居跡



尾根上に連なって見つかった集落跡（昭和30年代）
（アルファベットは地区名を示す）

このように、F地区住居跡は、会下山遺跡の中で最も大きく、最も高い場所にあつて、貴重なものがまとまって出土していることから、村長のような身分の高い人の家であったのではないかと考えられています。あるいは、住居ではなく、集会所や共同作業所のような集落全体で管理されていた施設であったのかもしれない。

まつりば 村の祭場

会下山遺跡では、祭場跡が2ヶ所で見つっています。

その一つが、F地区住居跡の北側にあるQ地区の祭場跡です。ここからは、石組や小さな建物跡などが見つかりました。また、男性器を模した石製品やガラス小玉など、珍しい遺物が出土しています。

もう一つは、会下山遺跡の最高点付近（標高約200m）にあるS地区の祭場跡です。この場所は眺望が大変良く、眼下に広がる平野や、大阪湾を越えて和泉地域や紀伊山地まで望むことができます。この地区からは、平面が円形で、東西約6.4m、南北約6.0mの大きさの穴が見つっています。この穴からは、二枚貝（サルボウ貝）の貝殻が20個出しています。また、食べ物を盛る高杯と呼ばれる土器がたくさん出しています。これらのことから、祭場では人びとが見晴らしの良い場所に集い、盛大な祭りが行われたと考えられます。



Q地区祭場跡の石組

ひ 火たき場とその役割

会下山遺跡では、火をたいたことによって土が真っ赤に焼け、表面に真っ黒な炭が付いている穴が見つっています。このような火たき場の跡は、N地区など、2ヶ所で見つっています。

これらの場所では、何のために火をたいたのでしょうか。その理由としては、調理をするため



発掘された火たき場跡の一部

の施設や、他の村に危険を知らせるためにノロシをあげたなど、いろいろな説があります。どの説が正しいのか、まだわかっていません。これらの説とは別に、金属器やガラス製品を作ったり、土器作りで土器を焼くための火だったのかもしれない。

火たき場の役割については、まだまだ謎ばかりです。

ほり 集落の北端にあった堀

会下山遺跡の北端には、二重の堀跡がありました。これらの堀跡の規模は、外側のものが幅約5.5m、深さ1m以上、内側のものが幅約3~4m、深さ約1.2mあります。なお、これらの堀がどのように巡っているのかは、まだ確認できていません。

これらの堀は、争いの敵の攻撃や、イノシシなどの動物の侵入を防ぐ役割があったと考えられます。または、S地区の祭場を日常の空間から区別するための結界の役割を果たしていたのかもしれない。



遺跡の北端で発掘された堀跡の一部

会下山遺跡の墓



M地区では、乳幼児を埋葬した墓跡と考えられる穴が4基見つっています。これらの穴の中には、土器が据えられたものや、ガラス小玉が出したのがあります。

ところで、会下山遺跡では、大人の墓は見つっておらず、どのように埋葬していたのかはわかっていません。

M地区で見つかった乳幼児の墓跡

会下山遺跡の植物

遺跡の土の中には、当時、その場所や周辺に生えていた植物の花粉や胞子などが保存されていることがあります。

会下山遺跡の土を調べたところ、たくさんの花粉や胞子が見つかりました。その結果、今から約2000年前の会下山遺跡に生えていた木々は、松が中心であったことがわかりました。

さらに、会下山遺跡の土の中からは、野生にはないはずの稲や蕎麦の花粉も見つかりました。これらの花粉から、会下山遺跡では、米や蕎麦の実の料理が食べられていたようです。ただし、稲や蕎麦の花粉は、稲粃や稲藁、蕎麦殻などにくっついて、平野の集落から持ち運ばれてきた可能性もあるので、これらの花粉が出たからといって、稲や蕎麦が会下山遺跡で栽培されていたと断定することはできません。

このように、遺跡の土に含まれる花粉などを調べることによって、当時の自然環境や、食生活、生業などを復元することができます。



土の中から見つかった蕎麦の花粉
(会下山遺跡・城山遺跡調査委員会委員
松下まり子氏撮影・提供)

会下山遺跡の出土品

会下山遺跡からは、当時のさまざまな道具が出土しています。出土品には、土器や石器、青銅器、鉄器などがあります。なお、当時は、木の道具（木器）もあったはずですが、2000年の長い間に、朽ちてしまって残っていません。

土器

日常的に使われていた土器には、壺・甕・鉢・高杯・器台などの種類があります。土器の形や、粘土に含まれる砂粒、表面を飾る文様などを詳しく調べると、その土器がいつ、どこの地域で作られたものかを明らかにすることができます。

会下山遺跡から出土した土器を調べた結果、近江（滋賀県）、河内（大阪府）、讃岐（香川県）など、遠くのさまざまな地域から持ち運ばれてきた土器が含まれていることが明らかになりました。これらの土器からは、会下山遺跡がいろいろな地域と活発に交流していたことがわかります。



出土した土器

石器

石器には、斧や錘、砥石など、さまざまな種類があり、矢尻や投弾などの武器もあります。

石を打ち欠いて作られた石器（打製石器）は、大阪府と奈良県の境にある二上山で採れるサヌカイトという石材で作られています。なお、磨いて作られた石器は、磨製石器といいます。

また、火山の噴火で生じた軽石が遺跡内に持ち込まれていますが、これらは木器を作る時に、紙ヤスリのように仕上げの道具として使用されていたと考えられています。



さまざまな石器

青銅器・鉄器

会下山遺跡が栄えていた弥生時代の中期から後期にかけては、ちょうど近畿地方で石器から鉄器へと移り変わる時代でした。

会下山遺跡では、青銅製漢式三翼鏃が採集されています。これは、中国大陸で戦国時代（紀元前403年～紀元前221年）の後期以降、秦（紀元前221年～紀元前202年）・前漢（紀元前202年～紀元8年）の時代に生産された青銅製の矢尻です。弩機という武器の矢先に装着されていました。

当時、大変貴重であった鉄器も多く出土しています。矢尻、斧、ノミ、ヤリガンナなどのほか、釣り針状のものも出土しています。



青銅製漢式三翼鏃
（現存長 4.4 cm, 芦屋市指定文化財）



中国大陸の武器（弩機）



さまざまな鉄器

ガラス製品

ガラス製品は、当時、装飾品として重宝されていました。会下山遺跡では、直径1～4mmほどのガラス小玉がいくつか出土しています。



ガラス小玉

